

オンタリオ州には乳牛と肉牛が多い。酪農は、とくに州西部と東部で盛んであり、肉牛と養豚は西部が断然強い。州農



ナイアガラ半島はカナダでも有数の農業地帯。

地全体（約六百四十万ヘクタール）の六割以上が牧草や飼料用穀物の栽培に当てられ、飼料自給率は非常に高い。オンタリオは養豚でカナダ一であるほか、プロイラーと七面鳥の飼育も盛んである。

果実栽培では、りんご、もも、洋なし、ぶどう、ラズベリー、いちご、さくらんぼが主体で、温暖なナイアガラ半島やオンタリオ湖、エリー湖周辺が産地として有名。

生産高でみた主な野菜は、トマト、じやがいも、スイートコーン、豆類、たまねぎ、きゅうり、人参など。エセックス地区やケント地区などの州南西部が主産地となっている。

林業・鉱業・エネルギー

鉱産物ではカナダ一 電力も安くて豊富

オンタリオ州は、州土の七七パーセントが森林である。そのほとんどが州有林で、民間業者は州から免許を受けて伐採加工している。切り出し量は二千百三十

万立米（一九八〇年）、カナダ全体の一三・六パーセントである。

州北部の広大な針葉樹林帯を主とし、これに南部の広葉樹を加工して、紙、パルプから木工品まで幅広い製品を作っている。カナダは全世界の新聞用紙の約半分を生産しているが、その四分の一はオンタリオ産である。

オンタリオ州は、カナダ最大の鉱産州でもある。ニッケル（世界の約半分、カナダ全体の八割を生産）、銅（カナダ全体の八割）、プラチナ（同十割）、ウラン（同六割強）、などの金属類ではカナダ随一で、日本へも輸出している。ニッケル、ウラン、銅、金、亜鉛、鉄鋼の主

鉱業は州の基幹産業のひとつである。



要六金属の昨年の生産高は合計二十四億ドル。カナダの金属生産高の九割を占めた。しかし、エネルギー資源は、ウランを除いてはごく少ない。

オンタリオ州の繁栄には安い電力の存在が重要な役割を果たした。発電量はカナダ全体の三五・三パーセント。火力が六割以上を占めるが、原子力の利用も盛んで、特にトロント近郊のピカリング発電所は、世界最大の商業用原子力発電所として知られる。

本田技研がカナダ進出 八七年から小型車生産

本田技研工業が、八七年からオンタリオ州のアリントン近郊で小型乗用車の生産を始めることになった。日本の自動車メーカーがカナダに工場進出するのは、これが初めてである。

計画によると、工場が建設されるのはトロントの北西約二十キロにあるアリントン（インシュリンの発見者バンティングの生誕地）の近郊。すでに確保してある約百八十二万平米の敷地に、溶接・塗装工程を含む最新鋭の一貫生産工場（約四万五千平米）と事務所を建て、八七年初めから生産態勢に入る予定。

生産規模は、初年度一万九千台。八九年までに年産四万台に引き上げる計画。車種は当初「アコード」でスタートし、のちに「シビック」を加える。

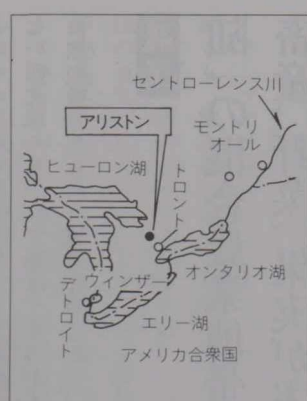
従業員は、フル稼働時に三百五十人の予定。用地、建物、設備を含めた総投資額は一億カナダドル（約百七十七億円）。当面はエンジンなどの主要部品は日本から送るが、徐々に現地調達率を高めていくという。

本田技研は、投資の一環として、生産される乗用車にカナダ製部品を多く取り入れるだけでなく、カナダの部品メーカーが技術・能力を一層伸ばせるように助力するため、自動車部品供給

開発プログラムを創設することになっている。

本田技研のカナダ進出は、日本の自動車メーカーの対加投資を強く希望していたオンタリオ州および連邦政府が大歓迎。発表も、同社の久米社長とラムリー通産大臣がオタワで共同記者会見を開いて行なった。

その中でラムリー大臣は、「カナダにおける本田技研の事業が急速に成長して、生産能力を高め、直接または間接的にもっと多くの雇用を創設するものと信じている」と述べた。またオンタリオ州のミラー産業大臣は、本田の



決定は同州の自動車部品製造工業の強さおよび北米自動車産業に占める同州の戦略的位置の良さを反映したものだ、と語っている。

なお本田技研工業は一九六九年、オンタリオ州スカバラに現地法人ホンダ・カナダ社を設立、同社製の二輪車、四輪車、汎用製品を輸入・販売している。バンクーバー、トロント、モントリオールなどに支店があり、従業員も三百五十人にのぼる。